

メキシコの「お盆」

鈴木 紀 (すずき もとゐ)

本館先端人類科学研究部



ソコヌスコ地方博物館／
メキシコ

ソコヌスコ地方とはメキシコ南部チアパス州の太平洋岸東部一帯の名称である。同地方の中心都市タバチュラ市の中央広場に面してアルテコ様式の建物が建っている。これはかつて市庁舎として使われていたものだが、ソコヌスコ地方博物館はその内部にある。開館は一九八八年、別名ソコヌスコ考古学博物館ともよばれる。

わたしは現在ソコヌスコ地方の農村開発の研究をしており、タバチュラ市に足を運ぶことが多い。二〇〇七年一〇月末、調査資料の整理の合間、気分転換にソコヌスコ地方博物館に歩いてみた。

見学を終えて思ったのは、この博物館がふたつの重要な役割を果たしているということだ。第一に地元住民にソコヌスコ地方の文化遺産のすばらしさを伝える役割である。展示物の大半はタバチュラ市近郊のイサバ遺跡の出土品である。なかでも石碑と土器のコレクションが充実している。一般にイサバはマヤ文明の形成に影響を与えた地方文化として知られているが、この博物館ではそれにとどまらず、先スペイン時代の主要な都市文明としてイサバを描いている。人びとは紀元前一二五〇年から紀元後一二〇〇年まで長期間にわたってイサバに居住したという。他にオルメカとアステカの遺物も展示されているが、それらはそれぞれイサバの前と後の文明というあつかいである。地元の小中学生の見学が多いらしく、子どもたちが手にふれて能動的に学べるように、展示方法にも工夫があった。

第二に地元住民の文化発信の拠点としての役割も見逃せない。わたしが訪問したときには、考古学資料の常設展とは別に、入り口ホールで「死者の日」の特別展が開催中だった。メキシコでは一月一日と二日に死者の霊

が帰ってくると思われられており、それらを迎えるための伝統的な祭壇が展示されていた。死を象徴する骸骨や、さまざまな供物、色紙などが美しく飾られていた。

ふと横をみると、驚いたことにFestival Obonという文字が目に入った。現地の日系クラブのメンバーがこの特別展に参加して、「お盆」を紹介していたのである。「先祖様の霊がもどってくる」という「お盆」の説明とともに、神棚や墓の模型など、日本の宗教文化が陳列されていた。さらに死の象徴なのか、はたまた現代日本のオタク系文化の紹介なのか、妖怪のフィギュア(人

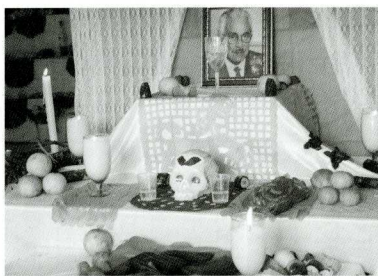
形が目をついた。そういえばここ数日、タバチュラの街ではアメリカ風のハローウィンの飾りやコスチュームがたくさん売られていた。この特別展は、流入するアメリカ文化に対する地元住民の対抗意識のあらわれとみてよいだろう。

メキシコの地方都市には、ソコヌスコ地方博物館のような、小規模博物館が多数存在する。その地方ならではの歴史解釈や文化発信に出合えるため、わたしはこうした博物館は捨てがたい魅力をもっていると思う。

タバチュラ日系クラブによる「お盆」の展示



ソコヌスコ地方博物館が入るタバチュラ市旧市庁舎の建物



死者の日の祭壇。ユーモラスな骸骨が死を象徴する



イサバ遺跡からの出土したカエルをかたどった土器